

聖書：コリント人への手紙第一 4：6～13

説教題：あらゆるもののかす

日時：2022年3月20日（朝拝）

パウロは1～4章でコリント教会で生じていた分派の問題を扱っています。1章12節で見ましたように、彼らは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って互いに争っていました。さらにこの手紙が書かれた時にコリント教会で働いていた働き人たちを巡っても同じような論争に明け暮れていたようです。これは当時、知識や知恵、雄弁術などを誇ったギリシャの文化を背景として、コリントのクリスチャンたちがこの世の価値観を教会に持ち込んだことの現れだということをパウロは述べて来ました。教会もこの世と同じように哲学的表現をもって力強く語ることができ、人々を引き付けることができる人にリーダーになってもらい、その人につくことによって自分自身も教会全体も高く上げようと彼らは躍起になっていました。その結果、コリント教会で生じていたのは妬みと争いであり、また神の宮である教会を壊しかねない動きでした。

このことに関するパウロの話はいよいよまとめられようとしています。彼は6節で「兄弟たち」と呼びかけて言います。「私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。」この言葉から分かることはパウロとアポロの関係だけが問題だったのではないということです。パウロが自分とアポロの名をあげて述べたのは、具体的な例を通して大切なことを学んで欲しかったからでした。まずパウロは「私たちの例から、『書かれていることを越えない』ことをあなたがたが学ぶため」と言います。この「書かれていること」とは、結論から言えば聖書を指すと考えられます。パウロはこれまで旧約聖書を繰り返し引用して来ました(1章19節、31節、2章9節、16節、3章19節、20節)。しかしコリント人たちは、この書かれていることを越えることを逆に誇りとしたようです。パウロが伝える福音はあまりに単純、初歩的で、幼稚過ぎる。そこで彼らはこの世に負けじと、そこに哲学的議論、この世の知恵や知識を足して、単純な聖書のレベルからさらに上に上って行く人が霊的な人、幼稚な段階を卒業して大人になった人と考えていたようです。

またこれと結び付いていたのは、「一方にくみし、他方に反対して思い上がる」ということでした。人があるリーダー、ある説教者に触れて、その人を好むことは自然で

あり、また良いことです。しかしコリント人たちがしていたことは、自分が好むリーダーを高く上げるために、そうでない人を引き合いに出して、その人を攻撃していたことでした。なぜこちらが優れてあちらがダメなのかを論じることによって、自らの知恵や判断力を示し、自己主張することができます。私は教師たちを格付けできるほど優れた識別力を持っていると。そうして彼らは思い上がっていました。そして自分と異なる意見を持つ人があれば喜んで参戦し、議論で勝つことによって、自分こそ優れた見識を持つ人間であるとアピールしようとしていました。

そのようなコリント人にパウロは7節で言います。「いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、もらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」 良い賜物はみな神から来ます。それは神が恵みとして私たちそれぞれに与えてくださっているものです。この根本的真理を正しく受け止め、神に感謝するなら、その人は誇らず、むしろ謙遜であるはずです。ところがコリント人たちは、自分が持っている特性を自分で得たように思っていました。彼らには確かに知識や議論できる力などがあったのでしょうか。彼らはそれを誇っていました。

そんな彼らについてパウロは8節のように言います。あなたがたは、もう満ち足りて、豊かで、私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに、と。これは読んですぐ分かると思いますが痛烈な皮肉です。本当の意味では彼らは王様ではありません。しかし自分で勝手にそのつもりになっていたということです。思い出されるのはヨハネの黙示録3章17節に記されているラオディキアの教会への主の言葉です。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。」 コリント人たちは、自分たちは賢く、レベルの高い成熟した人間だと自認して、自分に酔っていました。8節に「私たち抜きで王様になっています」と言われていますが、これはコリント人たちが自分たちは今やパウロたち使徒たち以上の存在になったと思い込んでいたことを指すのでしょうか。我々は今やあの使徒たちが知らず、経験してもいない、より高いレベルのことを知る、より勝る人間になっていると高ぶっていた。しかし彼らが誇っていたのはこの世の知恵であり、やがては過ぎ去る偽りの栄光でした。自分では王様になっているつもりでも、全くそうで

ないとパウロは言っているわけです。

このように王様気分であったコリント人たちに、パウロは神の知恵に基づく真の道を示します。それは使徒たちが歩んでいる道です。これまで見て来た 6～8 節は、コリント人たちが歩んでいたこの世の知恵に基づく道ですが、この後 9～13 節では使徒たちが歩んでいる神の知恵に基づく道が対照的に示されて行きます。

まず 9 節：「私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」 「最後の出場者」とはどういう意味でしょう。これは当時、ローマの闘技場で、見世物として最後に引き出された死刑囚を指すものと思われる。色々な戦いが闘技場で披露されて観客の目を楽しませた後、最後に待っていたのは死刑囚が引き出され、獣と戦わされ、殺されて行くことでした。人々はそれを見物して歓声を上げ、また罵声を浴びせ、熱狂し、興奮しながら、その光景を見つめました。つまりそこに引き出される人は最低の状態にある人間ということです。これは自らを王様ととらえて高い所で自己満足しているコリント人たちと何と異なるでしょう。大事な点はパウロがここで「神は私たち使徒を」そうされたと言っていることです。これは神の導きによることです。神に従う者たちはこうなるということです。

続く 10 節では使徒たちの歩みがコリント人たちと対照的に述べられています。パウロたちはキリストのために愚かな者となっていました。すなわちこの世から蔑まれ、見下される扱いを受けていました。それに対してコリント人たちは賢い者と言われていました。この世の価値観に従っての話です。「キリストにあって」という言葉がつけられています。これはここにある皮肉を際立たせるものです。ここの話の論理に従えば、「キリストにあって賢い」という言葉は本当は成り立たないはずですが、直前で使徒たちは「キリストのために愚かな者」と言われたばかりですから、キリストにあるコリント人たちも愚かな者と位置付けられて然るべきなのに、彼らはキリストにありながらこの世的に賢い者となっています。大いなる矛盾です！またパウロたちはこの世から見て弱々しいと軽蔑されています。それに対してコリント人たちは世と一緒にあってキリストの十字架や、その低い姿を軽蔑して、自分たちを誇っています。彼らはこの世的に強い者です。また三つ目にあなたがたは尊ばれているとあります。十字架

を避け、この世の考え方に自分たちを合わせているからです。しかし使徒たちは十字架の福音に立ち、それに基づく生き方をしているので、世から卑しめられています。

そして11節以降、自分たちはどのような生活をしているか、パウロは列挙します。11節の「今この時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく」というのは、宣教旅行のため、落ち着いた安全な生活が保証されず苦難の連続であることを語ったものでしょう。12節には「労苦して自分の手で働いています」とあります。当時ギリシャ世界では手を使う労働は卑しい人間のすることとして軽蔑されていました。それに対してパウロたちは宣教の働きから収入を得る権利があるのに、開拓伝道においてはそれが宣教の妨げにならないようにと自ら働いて生計を立てました。また12節後半以降の「ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけています。」という部分は、イエス様の言葉を思い起こさせるものです。イエス様は山上の説教で「あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい」とか「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われ、ご自身そのように歩まれました。使徒たちはそのイエス様に倣って歩んだということでしょう。

そして13節の最後は「私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。」と締め括られます。ここまで言うかというような言葉です。屑とはごみのことです。床をほうきで掃いて、最後にちり取りに集められ、ごみ箱に捨てられるだけのものです。一方のかすとは何かを磨いた時に出て来る粉のようなものです。人間の場合、体をこすって出て来る垢のようなものです。全く価値がなく、これもごみ箱行きです。

果たしてパウロはどんな気持ちでこの部分を書いたのでしょうか。自分たちはこんなに厳しい生活を送っているのにコリント人たちは自らを高く上げて自己満足していることを思い、恨めしい気持ちで書いたのでしょうか。パウロとしては一種の自己憐憫に陥りながら苦々しい言葉を吐いたということなののでしょうか。ある人はパウロがここまで書いたのはちょっと行き過ぎだった。いくら主のために大変な歩みをしている彼とは言え、ここまで書くのは残念だったと言います。しかしこれはそのような思わずうっぶん晴らしをした人間的な言葉と見るべきではないと思います。

パウロがこれを書きながら思っていたことは何と言ってもキリストご自身のお姿でしょう。死罪が決まった者のように最後の出場者として引き出され、みなの見世物になりながら殺されたのは何と言ってもキリストご自身でした。また世から愚かと思われ、弱く、卑しめられたのは誰よりもキリストでした。また飢え、渇き、着る物もなく、・・云々という部分もみなキリストに当てはまります。ののしられては祝福し、・・以降も、キリストご自身が生きた道でした。そしてこの世の屑、あらゆるもののかすのようにこの世において扱われたのはキリストでした。イザヤ書 53 章 2～3 節：「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちが彼を尊ばなかった。」　パウロたちはこのキリストに倣う歩みを神に導かれてしていたのです。

そして次回見るところですが、今日の部分を受けてパウロは 16 節で「私に倣う者となってください」と言います。ここから分かることは、これは単に使徒たちだけが歩む道ではないということです。次回はっきりすることは、パウロのこの 9～13 節をすべてのクリスチャンが倣うべき歩みとして提示しています。神の知恵に従う全クリスチャンが踏み行くべき道として示されているのです。私たちは、え～！一般のクリスチャンもここまでの歩みが求められるの？と思うかもしれません。しかしイエス様が福音書で語られた次の言葉が思い起こされます。ルカの福音書 9 章 23～26 節：「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか。だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやってくる時、その人を恥じます。」　実際、十字架につけられたキリストを救い主と告白してこの方に従う道を行くなら、この世から蔑まれ、見下されることを覚悟しなければなりません。私たちはどっちの道を行くのか決断を求められます。人々からの称賛を求め、この世の地位や祝福を得る道を行くのか。それとも十字架につけられたキリストを主としてお従いする道を行くのか。また神は一人一人に賜物を与え、御国のために仕える歩みをするように招いています。私たちは与えられた賜物をコリント人のように自分の栄光のために用いるのか、それとも神の国のために労苦しつつ用いて仕えるのか。こうして十字架につけられたキリストとともに同じ道を歩み、キリストに似

た者とされるところに私たちの救いがあります。パウロはピリピ書 3 章 10～11 節でこう言いました。「私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」ここにキリストの苦難にあずかり、キリストの死と同じ状態になることを経て、死者の中からの復活という最終的祝福にたどり着くことが言われています。ローマ書 8 章 17 節：「私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」ここにも今、キリストと苦難を共にしていることがやがての栄光に至る通路であると言われています。コリント人たちは十字架や苦難を嫌って、栄光の状態にひとつ飛びすることを望み、自分たちは今やそのような状態にあると考えていましたが、それは幻想でしかありません。神が用意された道は、キリストが通られたように、十字架を経て栄光に至るといふ道です。栄光に至る前段階の苦難をつまらない回り道、できればパスしたい道と考えてはならないのです。ある人は、苦難はむしろ栄光に至るメインハイウェイだと言いました。十字架につけられたキリストに倣い、その方に従う歩みの先にこそ真の栄光は用意されているのです。

以上、今日の箇所にはコリント人が歩んでいたこの世の知恵に基づく道と、使徒たちが歩んでいた神の知恵に基づく道の二つが対照的に示されていました。私たちに問われることは、果たして私たちはどっちの道を行くのかということです。その前にまずこう問う方が良いかもしれません。今の私はどっちに似ているか。もしかしてコリント人に似ていることはないか。8 節にあったように、満ち足りて、豊かで、王様のようになっていることはないか。また 10 節にあったように、この世的に賢く、強く、尊ばれている側に立っていることはないか。あるいは 9 節のイメージで言えば、闘技場に引き出されている者よりは、そこで戦わされている人たち、すなわち福音のために労苦している人たちを観客席の側から見物し、しかも良いシートに座って、それ、やれ！と拍手喝さいしたり、好き勝手に論じてブーイングを送る側にいることはないか。しかしそれはこの世限りの、やがては過ぎ去る栄光であるとパウロは語っています。

十字架につけられたキリストを感謝し、この方に従う歩みは、この世から見たら「屑」とか「かす」に見えるかもしれません。しかしパウロは決して残念な気持ち、沈んだ気持ちで、自分たちのことを「この世の屑」とか「あらゆるもののかす」と言ったの

ではないのです。「屑」とか「かす」は、この世の人たちの目を見た場合の表現です。しかし信仰の目で見ると、これは私たちが慕うべき道です。なぜならこれは私たちの主キリストに倣う歩みだからです。私たちの先頭に立って、らゆるもののかすとなってくださったキリストを見つめ、この方に感謝してついて行く名誉な歩みだからです。この道を行くところにこそ、キリストを深く知り、キリストと深く結ばれ、やがてキリストにあって栄光の復活に至る真の幸いがあります。私たちは十字架につけられたキリストこそを誇る者として、神の導きのもと、この方について行く歩みを求めたいと思います。そしてそこに与えられる真の幸いとやがての栄光に至る歩みを導かれて行きたいと思います。